

新宗教調査報告Ⅰ

調査研究の方針と課題

赤 堀 正 明

(現代宗教研究所主任)

現宗研では、昭和六十二年度の調査・研究活動の一環として、新宗教を取り上げた。(注)名称を「新宗教研究プロジェクト」とし、調査と研究を進めてきた。

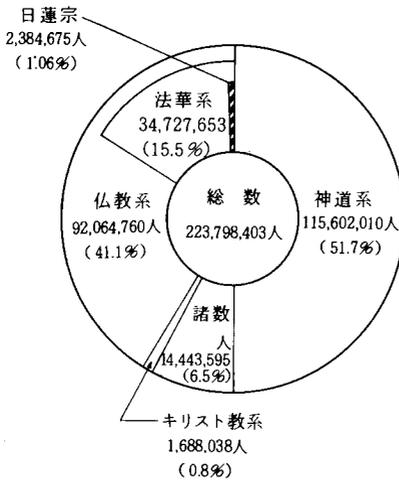
以下は、その報告である。

なぜ新宗教を調査、研究するのか

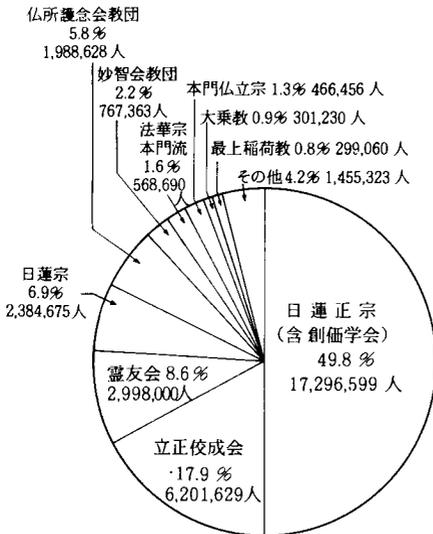
NHKの宗教意識調査の統計によると、現代の人々の多くが、宗教乃至は宗教的な雰囲気・に強い関心を示していることが明らかにされ、書店では宗教書のコーナーが大きな場所を占めている。

高度経済成長による社会変動に影響された、所謂宗教回帰現象は、昭和四十八年のオイルショック前後に現出し、従来の、巨大化した新宗教とは性状を異にする、新しいタイプの教団群を形成しつつある。これらの教団は、近代宗
教史の上に、「第三次宗教ブーム」として位置づけられるほどの急成長を遂げ、崇教真光・阿含宗・善隣会など数十万

図一 我が国の信者数
(昭和60年12月31日現在)



図二 日蓮宗と法華教団の信者数
(昭和60年12月31日現在)



人の信者を擁するまでに発展している。

周知のように、近代日本における宗教ブームは、幕末から明治初頭にかけて徳川幕藩体制が崩壊しつつある中で誕生した、第一次のブーム(大本・天理教等)、そして第二次世界大戦の敗戦により、天皇の権威が失墜し、社会的にも精神面でも、民衆が混乱をきたした時期に勃興した、第二次のブーム(創価学会・世界救世教等)が先行してある。

これら、三度にわたる近代日本での宗教ブームの中で、新宗教教団は着実にその教勢を拡大しつつある。

殊に第二次宗教ブームの中核として、最も巨大化した信徒と、近代化した組織を有し、一般社会への強い影響力を誇示しているのは、法華系(註2)の新宗教であると言われる。

昭和六十年現在の日蓮宗の宗勢を見てみると、我が国の信徒総数の中で、仏教徒は四一％に登り、法華系新宗教に所属する信徒が一五・五％を占める。その内、日蓮宗の信徒の割合はわずか一・〇六％に過ぎない。(図―1参照)

法華系教団の中で、最も多数の信徒を擁するのは日蓮正宗創価学会であり、約半数の四九・八％を占め、次いで立正佼成会が一七・九％、霊友会の八・六％と続いている。(図―2参照)

次に信徒の伸び率を見てみる。

四十年から四十五年までは高度成長の時期で、ほとんどの新宗教が信徒数を大幅に伸ばしている。四十五年から五十年までは、オイル・ショックの影響を受けて横這いか、下向している。この頃から、第三次の新宗教が頭角を現し始めてくる。五十年から六十年は、真如苑の急激な増加が目立つ。日蓮宗は、四十年から六十年まで終始変化なく、現状維持が精一杯であり、わずかに増加しているのは、人口増加に伴う自然増として見るべきであろう。(図―3・表^(注3))

―1参照)

これらのデータから短絡的ではあるが、日蓮宗が各時代に対応する適切な教化を施していなかったことが窺い得るのではないか。信徒の多寡が必ずしも、宗教の盛衰を徴証するものではないが、世法の開頭統一・広宣流布を願業とする日蓮宗徒にとつて、こうした現状を認識することは、百慮三省に備するのではなからうか。

従来から指摘されているように、日蓮宗教団は、徳川幕藩体制下で、檀家制度を中心とした一種の御用宗教化していた面があり、明治維新後も、その残滓を引き摺ったままに、今日に至っているのである。教団が、教祖の教義の具体化される主体であろうとするならば、教祖である日蓮聖人の主願の妙法弘通を以って教団の存在理由としなくてはなるまい。

新宗教は、この点において優れて教化本位であり、実践を内包する教学を構築して、ここに教団の存在理由をおい

図-3 日蓮宗と新宗教信者数の推移

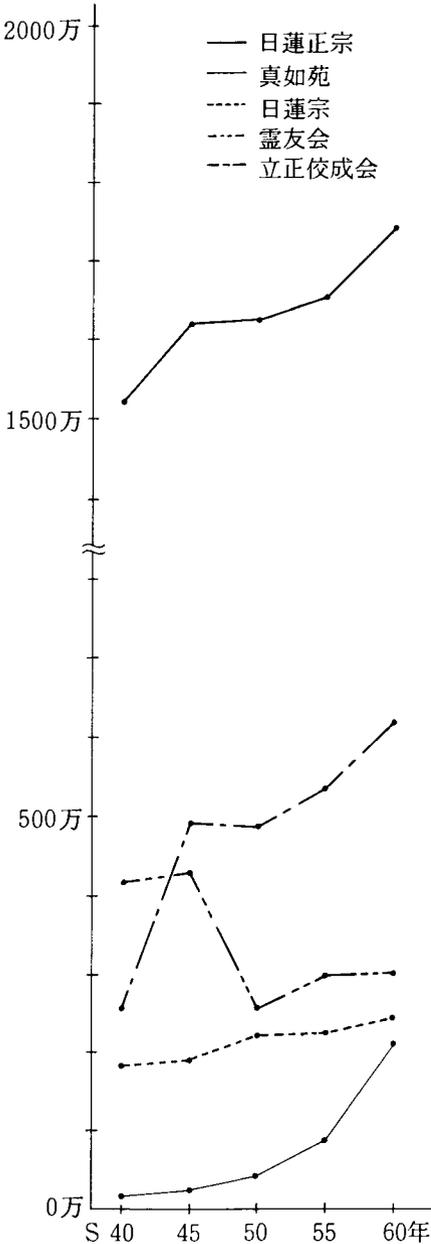


表-1 信者数一覧

年	総数	仏教系	日蓮系	日蓮宗	日蓮正宗	霊友会	立正佼成会	真如苑
60年	223,798,403	92,064,760	34,727,653	2,384,675	17,296,599	2,998,000	6,201,629	2,079,954
55年	200,395,255	87,745,179	32,302,819	2,282,103	16,518,697	2,971,600	5,308,241	856,992
51年	191,026,130	87,851,792	30,579,306	2,281,368	16,225,205	2,512,452	4,704,452	397,436
45年	178,971,327	84,960,083	31,887,015	1,779,703	16,201,488	4,259,587	4,849,476	190,631
40年	155,905,520	70,002,672	27,419,129	1,770,415	15,234,136	4,198,635	2,505,728	138,500

ている。この教化を以って教団存在の優先理由とすることの認識が、日蓮教団も含める伝統教団から欠落してしまっているものであり、この事が、教団をして現実の社会に対応する機能を低下せしめ、教化を接点としてのみ獲得される大衆のニーズを撰取する門をも、自ら閉じてしまふに至ったのである。この為、教化の名目を以ってされる布教活動も、所詮は教団側からの一方通行でしかなく、大衆の生きんがための支柱を模索する欲求は空を握み、心は充足されることなく今日に及んでいるのである。

試みに、法華系教団の教師一人あたりの年間の教化人数の比較を表にしてみると、教化能力の差の著しいことが明白となる。(表一参照)

ここに、どうしたら日蓮教団が本来の潑刺とした教化集団となることができぬかを主眼とする、新宗教調査研究の企画が需められるのである。

表一 2 教師一人あたりの信徒教化数

(単位：人)

	56 年		59 年		信徒増加数	教師1人あたりの信徒教化数
	信徒数	教師数	信徒数	教師数		
日蓮宗	2,287,640	7,464	2,292,701	7,743	5,061	0.65
創価学会	16,701,587	65,851	17,054,753	65,851	353,166	5.36
靈友会	2,962,880	3,152	3,000,000	3,417	37,120	10.86
立成校成会	5,393,944	14,510	6,013,401	16,422	619,457	37.72
真如苑	1,064,220	4,428	1,815,656	7,907	751,436	95.03

現宗研における従来の調査・研究活動とその検討

「日蓮宗現代宗教研究所」が設置された所期の目的に、「現代諸宗教の実態を調査し、本宗教学の現代的解明と時代に適応する布教大系の確立に寄与せしめん」（昭和三十九年『宗報』）とある。

現宗研が宗会で建議された昭和三十九年は、創価学会が池田大作会長のもとに、衆議院への進出と宗教政党である公明党を結成した年であり、また霊友会が南伊豆に弥勒山法華堂を建立し、さらに立正佼成会が杉並に大聖堂を建立し大教団としての地歩を固めた年でもあった。

新宗教教団躍進の当初、宗門はこれを高踏的に低俗視し、無視する傾向にあったが、創価学会の政界への進出等、社会的影響の拡大に伴ない、これを樂觀、座視することができず、調査研究に着手し、対応策を講ずる必要に迫られた。

こうした情況下に、現宗研は設置され、研究対象として新宗教に取り組んできている。

現宗研における新宗教調査・研究は今日までに、十余篇の報告と三冊の関連書が上梓されている。これらの成果を参校することは、今後の調査・研究の方向を推定する上で有益である。

表題を摘記する。

〈論 文〉

- (1) 中濃教篤「創価学会・公明党のイデオロギー」（所報No.1・S.42）
- (2) 望月一靖他「真宗大谷派・同朋の会運動調査レポート」（所報No.1・S.42）
- (3) 望月一靖「日蓮宗寺院活動における地域社会と大衆の問題」（所報No.1・S.42）
- (4) 中濃教篤「新興宗教の組織から学ぶものと批判するもの」（所報別冊No.1・S.42）

- (5) 中濃教篤「仏立講の発生とその史的背景」(所報No.2・S.43)
- (6) 現宗研調査部「真宗大谷派・同朋の会運動調査レポート(2)」(所報No.2・S.43)
- (7) 丸山照雄「新興宗教に関する調査研究の問題点」(所報No.3・S.44)
- (8) 冠一賢「幕末日蓮系新興教団の動向」(所報No.4・S.45)
- (9) 奥村健太郎・丸山照雄「天皇制と新興宗教」(所報No.4・S.45)
- (10) 梅原正紀「創価学会をめぐる社会的諸動向と言論の自由の問題点」(所報No.4・S.45)
- (11) 佐木秋夫他「《シンポジウム》創価学会の教義と思想的特質」(所報No.4・S.45)
- (12) 内山堯邦「みちのくの新興宗教・松緑神道大和山」(所報第六号・S.47)
- (13) 中濃教篤「長松清風と本門仏立講宗」(所報第12号・S.52)
- (14) 中濃教篤「創価学会の内部分裂と日蓮正宗」(所報第15号・S.55)
- (15) 長谷川正徳「本宗のお題目と新興宗教のお題目の違い」(所報第20号・S.60)

〈刊行書〉

- (1) 現代宗教研究所編『諸宗教理解の手引』(S.42刊)
- (2) 中濃教篤著『新興宗教とは何か』(S.42刊)
- (3) 中濃教篤述『創価学会の徹底的解剖』(S.62刊)

以上の報告を、今後の教化活動に視座を置いて通覧してみると、配意すべき点として次の事が言える。

一、本門仏立宗・創価学会を重点とする、法華系新宗教への取り組みが多くみられるが、教学、組織の研究を主とし、教化・布教の面にはあまり重点が置かれていない。

二、中濃教篤師は、「新興宗教の組織から学ぶものと批判するもの」の中で、立正佼成会の法座活動等を取り上げているが、教義・教条を基点とした批評であり、本宗の教化に取り入れる為の批判を指向してはいない。

三、丸山照雄師は、真宗大谷派の「同朋の会運動」の背景の一つに、創価学会が機能していることを指摘して、

「改革志向」の既成仏教教団には、尠なからず新宗教の影響が顕著であることを挙証している。

「同朋の会運動」のその後の追跡調査をはじめ、伝統教団の新宗教受容については、今後の課題として残されている。

これからの新宗教調査・研究の課題

調査・研究の結果は、当然、調査・研究の意図する目的によって異なったものとなる。従来の現宗研での調査・研究は、新宗教教団の概説あるいは日蓮宗を基準とした教典・教義の比較検討に重心が置かれている。又、組織、通過儀礼等の静態を主とし、入信者の意識・活動等の、人を対象とした動態の調査・研究は従属的であった。これは、創価学会の強烈な折伏に対する教義的逆批判の必要上、又、日蓮宗が最も伝統ある教団であり法華系教団の中核である、との認識からは当然の結果であつたともいえる。

こうした従来の成果を基にして、調査・研究の課題を挙げれば、次のようになる。

- (一) 新宗教の伝統教団への影響
- (二) 新宗教全体の、教化を中心とした把握
- (三) 法華系新宗教の総体的把握
- (四) 日蓮宗教化の活性化の為の、新宗教理解
- (五) 新宗教理解に立った、日蓮宗教化の試案作成

これらの課題を明らかにする為に、何を規準として調査を進めたらよいであろうか。

調査・研究の規準

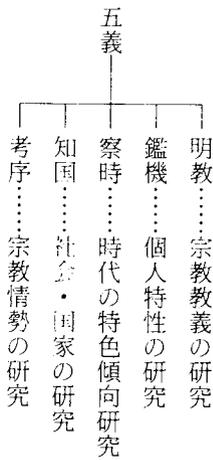
私は、調査・研究の規準に日蓮聖人の五義判を依用すべきであると考え。五義判は、聖人が法華經神力品等を依拠として立てられた教判である。

これは、一義には立教開宗の必然性を總体的に立証し、法華經のみが世界に流布して、人類を救済する理由を論証するものである。

もう一義は、「仏法を弘めんとおもわん者は、必ず五義を存して正法をひろむべし」(顕謗法抄)とあるように、末代に仏法を弘めようとする人の心得としてこれを留め置かれている。

これは、比較宗教学的にも、多角的、総合的な客観性に富んだ比較規準であるといえる。

五義の概要を図示する。



これらの五義は、判釈上同等の重さで用いられなければならないが、ともすれば「教」に重点が置かれるあまり、他の「四義」を軽微に扱うことが儘ある。これが実は独善的な教化の陥穽に落ち込む素因であり、現在の日蓮宗もこゝうした穴虚に佇んでいると勘える。

聖人の判教は、教理の浅深によって勝劣を定めるもの他に、積尊出世の根本意義と、人類永遠の非願である仏国の実現と、そこに至る實際的效果とを規準とされている。この義から、当然、この五義判を、現代宗教判釈の綱要として、新宗教の研究にも依用すべきであると考えらる。

五義判は時代を通過する判教規範であり、現代の教化もこの関門を通過して初めて現代相応の正教と言い得るのではないだろうか。

今後は、五義判に準拠して、調査・研究を進める必要がある。

調査・研究項目

これまで考究してきたところを基にして、調査項目を仮設すると、

- (一) 沿革
- (二) 教義・教典
- (三) 帰依の対象(本尊・祭神)
- (四) 組織・機構並びにその機能
- (五) 管理運営法と財政について
- (六) 未信徒の教化Ⅱ布教について
- (七) 宗教体験の実際と意義
- (八) 信徒の守るべき事項
- (九) 入信して良かった点、悪かった点
- (十) 既成仏教教団(日蓮宗)との相違点・魅力

(二) 他宗教との関係

(三) 参考文献・資料

となる。(一)、(二)、(三)、(四)、(五)、(六)、(七)は教団調査^(註)の分野にはいり、基礎資料として欠かす事はできないものである。ここでは、教団の創始者・沿革・教義・儀礼・組織・実践等を明らかにすることを目的とする。この内、儀礼・実践を除いては略、教団内外の出版物により知ることができる。儀礼・実践に関しては、教団に入団したことのある人からの聴取、或は、調査する本人が体験的に入団して、調査する場合もある。ここでは、僧主導型の既成仏教と、在家主義に立つ新宗教との対自・對他儀礼の比較等が調査される場所である。

次に、(七)、(八)、(九)は個人調査の分野にはいり、信者個人の入信過程、活動状況、宗教体験、宗教意識等について明らかにするのを目的とする。ここでは、教団の教義がどのように信徒に伝達され伝播していくか、教化のプロセスを調査し、教化者としての熱意を持った信徒が何故多く排出するか等を解明したい。

昭和六十二年度の調査活動

法華系新宗教の分野では、「妙智会」の小林永司氏から、教団と氏との関わりを中心とした高話を載せた。

「妙道会教団」は、大阪市天王寺の本部を訪問し、宮尾早雄氏から教団設立当時の逸話等傾聴すべき講話を伺った。又、法華系以外の新宗教では、京都市亀岡に「大本」本部を訪ね、諸殿を参観し、豊田秀満氏からは体験を主にした宇宙観等についての法話をお聞きした。

「天理教」は、本吾婦分教会の八島英雄氏から、開祖の中山みきの教義と、その変遷について講演いただいた。なお、「妙智会」と「天理教」は、本書にその筆録を掲載し、「妙道会」と「大本」は研究員の報告を載せた。

註1 新宗教を調査研究の対象とする際、何を指して新宗教と呼ぶかの問題がある。視角の相違により、「新宗教」「新興宗教」

「新宗教運動」「新興教団」といった、少しずつニュアンスを異にする表現がみられる。それぞれの用語に着意の相違からくる特色があるが、ここでは、宗教的な由因からでなく、外的な縁由からの価値を付加された「新興宗教」でなく、現在、学会の通語となつている「新宗教」を適當の語として用いる。

又、概念規定も、その成立時期と併せて諸説がある。ここでは、幕末期以降に成立した民衆、即ち既成教団に属さない人によつて展開された宗教運動で、これまで「新宗教」「新興宗教」「新興教団」「新宗教運動」として研究対象とされ、取り扱われてきたものをすべてを「新宗教」として位置づける説をとる。(表—3参照、末尾に掲載)

従来の研究は、日本の近代化をエボックとした、歴史的区分法によつて新宗教の発生時期を考察してきているが、これは、宗教運動を、社会変動に付随する一つの社会現象としての側面から捉えたに止まり、宗教の自発的運動展開を軽視していることになる。こうした観点からして、特定の歴史区分をせずに、幕末以降に新しく興起した宗教という意味で「新宗教」と規定しておく。

註2 新宗教の中で、日蓮宗、又は法華宗系の既成教団から分派の形をとつて一派を為した教団、或はそうした教団に関係して

甚間、法華経信仰活動を行っていた人々が興した教団等を、

イ、法華経を所依の教典とすることから「法華系」

ロ、お題目を唱えることから「題目系」

ハ、日蓮聖人の教義を依拠とするところから「日蓮系」と呼称されている。

ここでは次の理由により「法華系」を以つて代表させる。

一、孝道教団は霊友会から昭和十年に独立したが、天台系に所属しているので日蓮系とは言いがたい。

二、立正佼成会も霊友会から分派したが、真実顕現以降は根本仏教(原始教典に仏教の根本思想があると見る)と法華経を依拠として、日蓮聖人は複数の先師の内の一人として位置付けている。

三、創価学会は積尊を脱仏として尊崇しないが、その所説である法華経は読誦し題目を唱える。

四、各教団共、法華経を何らかの形で読誦している。

註3 図2、図3、表1、表2のデータは、文化庁編の『宗教年鑑』（昭和六十一年度版）を使用した。

註4 新宗教は信徒のすべてが教化者であるといった見方もできるが、ここではあくまでも、専従教師一人当たりとしての計算として、いる。

註5 「新宗教研究調査ハンドブック」（井上順孝他共著、雄山閣刊）には、新宗教調査を類別して、

① 教団自身が運動の方向性や組織・指導体制のあり方を模索するために行なう「実践のための調査」

② 教団に対しては中立的であることが期待されている文化庁宗務課や新聞社等が、行政目的や実態把握のために行なう「現状分析のための調査」

③ 学問的な命題を検証し、より普遍的な理論を構成するために行なう「研究のための調査」

の3項が挙げられている。

この中、現宗研の調査活動の着意は、最終的に①の「実践のための調査」に近いが、あくまで調査は、恣意的、功利的な俗慮による自教団過重の弊習に陥らないように、②③の科学的、客観的姿勢に立却した研究を土台とし、これに配慮しながら①の調査結果を導き出すように心懸けるべきであろう。

従来、現宗研における調査研究は、①を企図しつつも②③の一部で停まっていたが、今回の調査研究では、殊に①の「実践のための調査」に意趣を置いて累進したいと考える。

またより、②③の調査研究の進展・充実が、そのまま①の暗正な結果を引き出すものであり、その調査順序は②↓③↓①と看なして進める。

註6 新宗教研究調査ハンドブックには調査を①教団調査、②地域調査、③個人調査の三種に分類している。

表-3 新宗教の開教年次

開教年次	教 団 名	教 祖
文化11 (1814)年	黒 住 教	黒 住 宗 忠
天保9 (1838)年	天 理 教	中 山 み き
安政4 (1857)年	本 門 仏 立 宗	長 松 日 扇
“ 6 (1859)年	金 光 教	川 手 文 治 郎
明治25 (1892)年	大 本	{ 出 口 な お 出 口 王 仁 三 郎
大正2 (1913)年	ほ ん み ち	大 西 愛 治 郎
“ 8 (1919)年	円 応 教	深 田 千 代 子
“ 13 (1924)年 (昭和21年)	ひ と の み ち (P L 教 団)	{ 御 木 徳 一 (御 木 徳 近)
大正14 (1925)年	霊 友 会 教 団	{ 小 谷 喜 美 久 保 角 太 郎 牧 口 常 三 郎 戸 田 城 聖
昭和5 (1930)年	創 価 学 会	{ 谷 口 雅 春
“ 5 (1930)年	生 長 の 家	谷 口 雅 春
“ 10 (1935)年	世 界 救 世 教	岡 田 茂 吉
“ 11 (1936)年	孝 道 教 団	{ 岡 野 貴 美 子 “ 正 道
“ 11 (1936)年	真 如 苑	{ 伊 藤 友 真 司 “ 真 司 乘
“ 13 (1938)年	立 正 佼 成 会	{ 庭 野 日 妙 敬 長 沼 妙 佼
“ 20 (1945)年	天 照 皇 大 神 宮 教	北 村 サ ヨ
“ 22 (1947)年	善 隣 会	力 久 辰 斎
“ 25 (1950)年	仏 所 護 念 会	関 口 嘉 一
“ 25 (1950)年	妙 智 会	宮 本 ミ ツ

注) 「ひとのみち」は戦後「PL教団」として再発足した。

※「仏教宗派の常識より」